

2016.9.17 in Yaesu Tokyo

2016 雪合戦

審判サミット

報告資料

報告資料: 議事録ほかを青文字にして検討資料に加えました。 参加の皆様ありがとうございました。 未確認でしたが共同声明は下記のようにさせていただきました。



我々は参加者は雪合戦に対する想いはひとつであり、
現在のルール・審判規則が引き続き統一されたものになるように
今回の認識を持ち帰り、今後も検討を重ねて行く。

御礼

冒頭でお話させて頂いたように今回の雪合戦審判サミットでの内容についてはなんの権威もありません。
2会場で3時間半ほどの実質時間でしたがまだまだ、検討時間が必要な事はみなさんも感じられた事だと思います。
また、各地の大会運営体制や、開催の目的によっては今回の内容が全てでは無いと思っています。
最初の現状報告の内容で雪合戦がまだ発展途上であることもご理解いただき、今回東京に集まったみなさんが
これからの雪合戦界に何らかの形であっても関わっていただくことに期待しております。

今回はさすがに、結論まで至る内容には出来ませんでした、
最初①の「アウトコールを受けた選手の持っている雪球の処置」については、ほぼ全員の賛同を得た回答であったと思います。
またこのような機会を頂ければ幸いです、出来れば一つの組織の主催であって、編集部が取材を許される立場であることをのぞみます。

次号10号となる雪合戦マガジンで今回の内容について掲載させて頂き、みなさんのお手元にもお送りいたします。
引き続き、雪合戦をよろしくお願いいたします。

■スケジュール

15:30 開始 一次会議

- ① 現行ルールの相違点検証
- ② 審判について
～スキルアップのための検証 参考映像等
- ③ 地域からの報告

17:50 ～後片付け 終了

18:00 前に退出 全員で移動

18:10 二次会議場

～会議続き 食事、～懇親会

21:00 とりあえず中締め 散会

■ 会議のルール

- ① 堅苦しい会議ではありません。
- ② 参加者個人の意見尊重
- ③ 前向きに建設的な意見をお願いします。
- ④ 基本前提ルール、一回の発言は1分間
- ⑤ 発言の際は挙手
- ⑥ 昔話は禁止

●目的

【1】 雪合戦の普及

【2】 ルール・審判の認識確認 ～ルールの相違点について統一出来る方向を探る。

【3】 参加の皆さんによるコミュニケ(共同声明)を雪合戦マガジン掲載

〈テーマ〉

① 現行ルールの相違点検証 《資料》改訂ルール比較表
～ルールの相違点についての統一出来る方向を探る

② 審判について ～スキルアップのための検証 参考映像等

③ 地域からの報告

【進行方法】

(1) 趣旨説明から、最初に挙手による判別 ※二択、もしくは三択

(2) 選択した二手に分れて意見交換

(3) 再度、挙手による判定 ※賛成、反対、問題継続の三択

(4) 共同声明 ～企画参加者として

雪合戦界の現状

国内チーム数

	チーム数	複数大会
一般	783	133
ミックス	99	11
計	882	144
レディース	78	25
小学生	183	22

【議事報告】

- ① 今回の試みは、雪合戦界の現状を知ってもらう事
- ② 同じく審判・ルールの2つの方法がある事でその違いと考え方を共有し一本かの方向を探る

検討会に先立ち、編集部視点で、雪合戦界の現状をプレゼンさせていただきました。

雪合戦マガジンPA2016に掲載した 大会参加チームリストより集計した全国の雪合戦チーム数

●ミックスを含め、約1000チーム。 その中で複数大会(2~4大会)に出ているチームは約140

※そのほかの大多数は年に一度の大会参加のチームであること→イベント志向が多い

※レディースにおいては特にチーム数が減少傾向。ミックス部門の成功例を紹介。

※小学生は流動的な数字 同じチーム団体で ABCでグループチームの割合も高い

雪合戦マガジン販売数 1000部 / 雪マガP.A 400冊 9月現在

選手の競技性 > 審判スキルの停滞

=雪合戦界全体が、全てそうでは無い。

【議事報告】 編集部からの現状プレゼン～

- チーム・選手の戦術的な進歩に比べて 審判スキルが追いついていない指摘はかれこれ10年近くなっている。前述の雪合戦チーム数集計でもわかるように、かなりトップクラスのチームが対象になる事であるとも言える。とは言え、競技の進歩のためにはちゃんとした判定がされない競技の発展も無い。

明確なルール : シンプルなルール

共通のルールと共通の解釈無くして、正しい「判定」は出来ない。

●組織が違う、詳細ルールが違う

- ルールをシンプルにしていく方向は賛同できるが 上級審判、審判講習講師には、様々なケースの対応において共通な認識が必要である。
- 共通のルールに越したことはない。組織による違いの上に、異なるルールが存在する。

審判員の確保 と レベルアップ

審判員増員／雪合戦相互審判制／審判育成する機会

【議事報告】 編集部からの現状プレゼン～

●各地の大会開催立ち上げから、審判員の確保は共通の難題 審判を増やす事も必要だがチームを巻き込んで相互審判制を採用してきた例が多い。課題は審判のスキルアップ、育成する機会が求められる。

指導者のスキルアップと均一化

「組織的」取り組みが必要／数少ない機会／「指導者」の存在と同じスキルを分つ

- 組織による違いの上にルールが異なる。その上、上級審判や審判講習講師の認識が統一されていない事例が多く存在する。
- 雪合戦審判員について言えば、同じ認識の指導者が必要。育成のためには組織的な取り組みも本来必要

誰でも楽しめる雪合戦

上級者も、初体験者も、そして審判も。明確なルールと、逆にルールに縛られない、やり方。

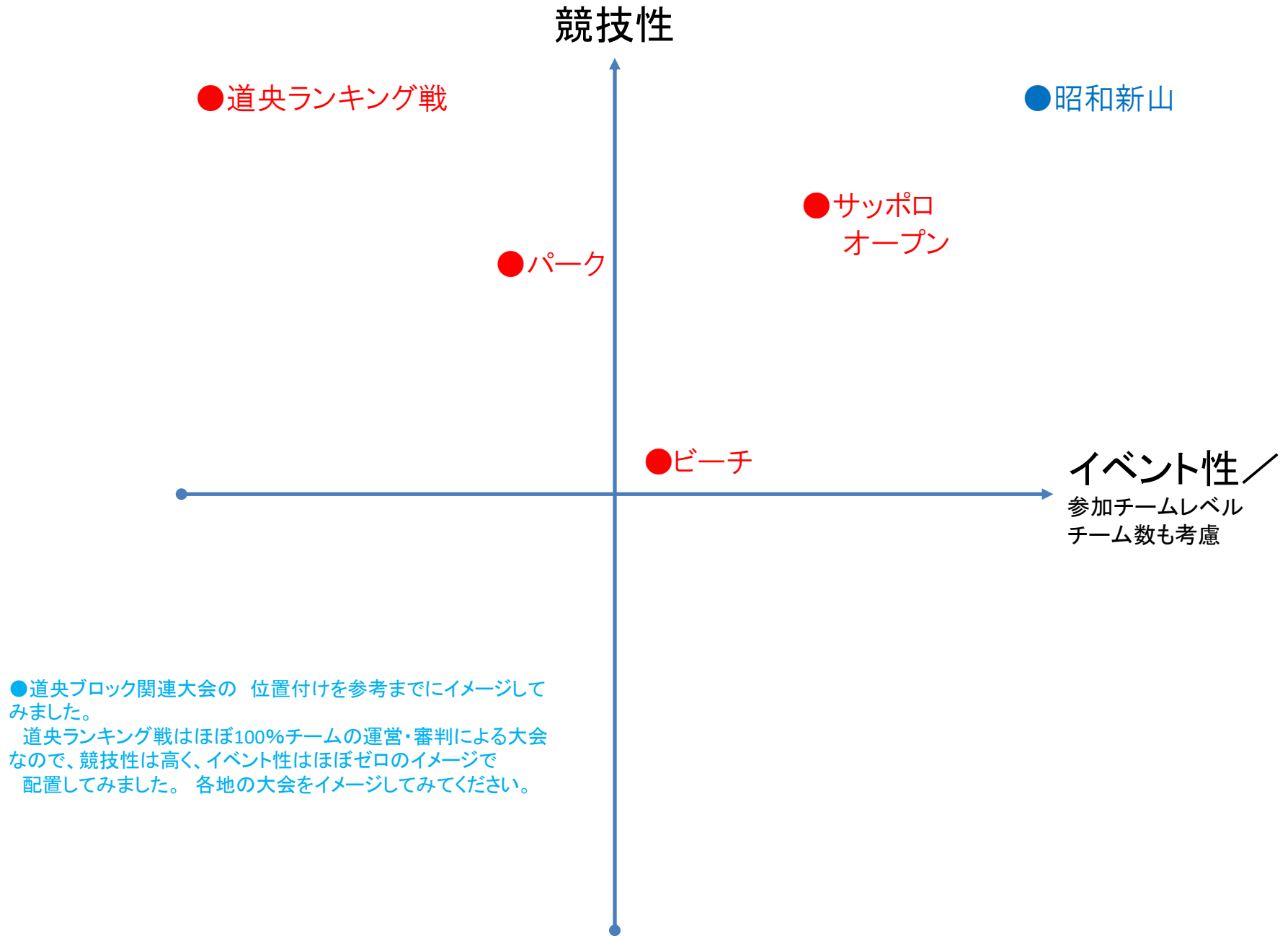
【議事報告】 編集部からの現状プレゼン～

- 大会運営者も含め、すべての雪合戦関係者が 雪合戦に実際に参加したり、楽しめる事が必要。
- 明確なルールも必要であるが、同時に楽しむ雪合戦を優先の場合、ルールに縛られないやり方(ローカルルール)も必要

すべて、目指すもので 変わる

競技として or イベントとして / クオリティ or 参加者数(チーム数)

- オリンピック種目を目指す競技大会にするのと、地域おこしのイベントとして沢山のチーム参加を目指すのではルールの考え方も内容も変わって来る。但し競技普及のためには競技ルールを理解した上での、両方の対応が必要。



①アウトコールを受けた選手の持っている雪球について

昭和新山=世界雪合戦連合	日本雪合戦連盟	検討ポイント	意見 メモ欄
<p>持っている雪球を全て持って出る ※置いて出た場合 チームにイエロー ※⑦ただし書き</p> <p>「アウトの選手から直接雪球を受け取った時」を削除</p>	<p>持っている雪球をその場に置いて出る。</p> <p>※16条7 アウトの定義 「アウトの選手から直接雪球を受け取った時」</p>	<p>※無効球の定義 「アウト競技者が持っている雪球」</p>	<p>【広島案】 6) * 置いて出る方が良い * アウト競技者が持っている雪球が無効球置いた球は無効球では無い。 * 直接受け取ってもアウトとしなくて良い * なぜなら残した球か、どうかの判断は困難であるから。 * ただし、アウト判定を受けてからの雪球の補給行為には警告の対象とする。</p> <p>【稚内・市川案】 雪球をルールで縛ろうとするのが全くわからない。 * 直接受け渡した選手をアウト。しかも置いていったらチームにイエローって「そんなに重罪？」と思う。 * 別に補給して出て行っても構わないのでは？</p>

②フライングの定義

<p>～選手が動作を開始した場合。 ⑥ ※以下、運用に当て記載された内容</p> <p>「動作」とは、攻撃しようとする行為、相手のフライングを誘発しようとする行為などが対象とされるが、その対象行為について明確化し、運用することが望ましい。 → ローカル解釈で静止も</p> <p>主審がヨーイ！とコールしてから、手を広げる(コール優先)ホイッスルまで (同時両手を前で合わせる)</p> <p>⑨3-2審判動作</p>	<p>※どちらか一方、または両足でバックラインを踏む ～静止する必要はない。と明記</p> <p>主審が両手を180度広げてからホイッスルまで (同時両手を前で合わせる)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 異なるルール 認識の統一 わかり易さ <p>イエロー対象からフライングアウトに改訂したのは両組織とも同じ</p> <p>【従来は共通の記載】</p> <ul style="list-style-type: none"> 審判が両手を広げる 後ろ向きの副審がそれを目視確認しバックラインを見る 副審がバックラインを見たことを確認して ホイッスルを吹く(両手を前に合わせる) 	<p>【広島案】 6) * フライングアウトの判定は無くして良い。フライングの時はやり直して良い。 * フライング定義は日連の方が解釈しやすい。</p> <p>【稚内・市川案】 * 特にメリットがあるわけではないので、～静止する必要はない。球を投げた場合だけで良いと思う。</p>
--	---	---	---

①アウトコールを受けた選手の持っている雪球について

【最初の支持投票】

●持って出る 0名 ●置いてでる 20名 ●保留 2名

・その場に置いて出る 置いていった雪球は使用できる。

無効球の定義から解釈 「アウト競技者が持っている雪球」 置いて出ていけば無効球では無い

【広島、市川意見への支持 15名】

アウト選手の補給、直接受け取った場合のペナルティについては触れず、継続事項

・昭和新山は段階を置いて、見ているので変わる可能性はある

②フライングの定義

【最初の支持投票】

●新山方式 8名 ●日連方式 7名 ●保留 7名

【よーい！／誘発する動きをフライング】支持の意見

・審判、選手、監督もスタートのタイミングがわかりやすい。

・センターへ走る、スタート競技 なので他のスタート競技同様が分かりやすい。

・従来の方法では主審と副審の動く確認手順が複雑な上、主審の両手を見ていない副審も多い。

【従来の方法／ラインを踏んでいれば静止する必要は無い】

・選手目線で。寒い中でやる競技であり、静止して何秒も笛と足を判断するのは

動かしながらやってもラインを踏んでいれば問題ないという判断

野球の打席のウォームアップ的なもの。

【どちらの方式にも】

・フライングを取るための目的とする判定なのか。笛までのタイミングを余計に取るケースもある。

主審の基準統一も必要。 厳しすぎる審判、 フライングを取るための基準か、させない為の基準か。

●本件は3つに別れた為、持ち帰り協議検討とした。

③VT戦における サドンデスの扱い

昭和新山＝世界雪合戦連合	日本雪合戦連盟	検討ポイント	意見 メモ欄
<p>最終セットに出場していた7名で行う ⑤ ⑩ ～勝敗が決しない場合は、2巡目に入る。 ただし、 投球の順番は1巡目と同様とする。 なお3巡目も同様とする。</p> <p>一連の動作としてラインを出たときは～無効 ※ラインを出たときは、足が完全に出た場合や、体の一部がライン外に出たときを言う</p>	<p>競技者7名により実施する ～前号によっても勝敗が決しない場合、競技者7名の内一名ずつ前号同様に行い →新たに列を並びなおし※に変更</p> <p>一連の動作としてラインを出た、または触れたときは～無効</p> <p>※一回り後、新たに列を並びなおし～と表記を補足</p> <p>2015年12月改訂 詳細、細則の整理 補足</p>	<p>※解釈の確認</p> <p>※VT戦の選手の配置図</p> <p>※記録用紙へのゼッケン順記載必要</p> <p>確認：シェルター、ワンバウンドで落ちた場合 無効</p>	<p>【稚内・市川案】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初からサドンデスでも良いのでは ・雪ダルマが落なくとも成功にしていはもともと雪合戦は当たればアウトのルール 風が強い地域では雪ダルマを固定出来る。

●中断時

<p>～雪球を持ったまま、そのまま動いてはならない ⑥</p> <p>・異なるルール</p> <p>6. 5 試合を再開するときは、セット開始時と同様とする。なお、雪球の持ち直しも可とするが選手が持てる雪球は1人1球以内(自陣コート内にある雪球のみ)とする。</p> <p>※ただし、相手コート内まで攻め込んでいる場合に持っている雪球はそのまま1球。</p>	<p>中断の合図のとき、 手に持った雪球すべてをその場に置き、指示を待つ(改正)</p> <p>もったままから→その場に改正</p> <p>●中断処理について 新版で詳細を追加</p> <p>【中断の審判要領の記載】</p> <p>副審→ 主審中断 → 記録ストップ 共通 中断は主審の合図による。</p>	<p>・異なるルール ・認識の統一</p>	<p>【広島案】 持っている、置くはどちらでも良い。 再開時、1個持って再開。</p> <p>【稚内・市川案】 雪球は全てその場に置かせた方が良いと思う。 中断してから拾う選手もいるので。</p>
---	--	---------------------------	--

③VT戦における サドンデスの扱い

【最初の支持投票】は無し。

●※一回り後、新たに列を並びなおし〜と表記を補足 2015年12月改訂詳細、細則の整理補足ページ

・島根夏の陣でサドンデスのふた回り目で列の順番を並び替えていたケース
改定された内容かと認識したが、競技規則の表記では 従来の『前号同様に行く』となっているので矛盾している。

・細則の整理補足ページでは 図面を入れて 最初の5人と 続く2名と監督を 二列で表記しているので
「新たに列を並びなおし」とは 二列を一行にという意味ではないのか。 別紙資料

・詳細は日連のルール確認となりました。 記載の仕方により意味を取り違えるケースもある。

●その他の意見

・最初からサドンデスでも良いのでは

・イベントの中では3セット控えの選手も含めて仕切りなおして良いのでは。(ローカルルールとして)

・VTの的は雪だるま以外でも良いのだが シェルターの前、中央、奥など置く位置の定義が無い。 各意見は持ち帰り。

④中断時 雪球を持ったままそのまま動かす / 手に持った雪球をその場に置く

【最初の支持投票】

●新山方式 5名 ●日連方式 5名 ●保留 12名

【雪球を持ったままそのまま動かす】適用の理由 / ・中断時に選手が持ち直したり雪球の移動など不正を防ぐ

【雪球をその場に置き、指示を待つ〜改正】

・その場に置くという事は、最近の展開で敵陣1シェルも含め、前方に球を運んでいる場合もあるので持っている球を敵陣に置いて来ることになる。

・中断時、雪球を持ったまま相手コートに攻め入っている時の中断の場合、手に持った雪球を相手コートに置く事になる。

・再開時の持ち球が1球というのは同じルール 但し、新山は「自陣コートにある雪球」と記載している。

日連には 自コートという記載がない。

・チームは中断時に次の展開を如何に有利にするか考える。雪球の位置や、雪球の移動など不正を防ぐ意味合いがある。

【どちらでも良い】 広島案

※中断時、審判全員協議のため、「その場」や「置く」、「持って動かす」が存在する。

●認識の違い確認にとどめる。 どちらでも良いという意見もあったが、明確な見解を示すのが適切では

⑤コート規格 バックラインの位置がエンドラインから6Mか8M

- 新山6M 7名
- 日連8M 4名
- 保留 10名

※経緯の確認 もともとコート規格に40M、36Mがあり 昭和新山が40M規格から36Mに変更した時に2シエルの位置とバックラインの位置をそのままに維持したため エンドラインの位置を2M縮めた結果になる。日連は従来の36Mコートルールを継続。そのタイミングで組織分裂があり、現在に至っている。昭和新山、日連大会の両方の大会に出場しているチームだけの問題ではない。

- 現在、日連に40Mコートは存在せず、32Mも小学生用規格とせず、32Mコートでの運用も可としている。

- ・希望 実際のルールで変えたのは 新山
- ・審判目線で センターまでの距離があると余裕(見やすい?)
- ・フラッグダッシュまでの距離の違い
- ・フォワード陣とバック陣の異なるスペースで
6人制の後ろ向き、8人制の前向き審判の審判目線でも判断基準が分かれる
- ・2シエルから センター、1シエル、2シエルへのロブを精度みると、競技性では難しい距離となっている。
特にレディースは雪球が届かない場面も
- ・外国チーム40Mの新山コートが良いという意見がある
- ・会場、運営上のちがひ 小学生/レディース どちらにも使える
- ・一般の上級チームは統一が必要
- ・スタート時の対面距離は8Mの方が速球主体のチームには有利
- ・昭和新山サイズはスタート時、2シエルからの距離が遠く、レディースチームの競技対応が難しい。
- ・統一したほうがいいのか しないほうが良いのか
- ・それぞれに合わせりゃいいという選手も
- ・地方によってローカルルールありで新山方式採用もある。

今回のテーマの中では一番、注目されるテーマであるが いろいろな意見、判断基準があり、どちらも、一方に歩み寄る判断も難しい。

折衷案で間を取り、 **お互い1M歩み寄りバックラインから7Mで一度やって見る事も提案としてはある。**

※マガジンは一石を投じる意味でこれで掲載させていただきます。

⑥ 審判員の配置

⑪

昭和天山=世界雪合戦連合	日本雪合戦連盟	検討ポイント	意見 メモ欄
<p>8人制 前向き</p> <p>【問題点】 ※2シェルの審判位置があいまい ※バックライン審判が広範囲</p> <p>～運営の事情により5名とすることができる。⑧</p>	<p>6人制 後ろ向き 以前はこの方法で統一されていた。</p> <p>※8人の場合もあるが その場合はバックラインへ1名配置 フラッグ奪取担当で追加</p> <p>1シェル、2シェルは後ろ向きのまま</p> <p>～主審1名副審5名以上とし～</p>	<p>※ ワンバウンドの判定 ※ アイコンタクトの活用～セーフコール ※ 見落としポイントの検証 センター2トップの間</p>	<p>【広島意見】 * 試合開始時に 選手を正面から アウト競技者を見て判定する。 * 試合中は後ろ向きで シェルターワンバウンドが良く判る</p>
<p>⑥審判員の配置 資料を別途添付 ここからは映像をみながら編集部よりポイントを発表し確認をお願いしました。</p>			

審判人数が多い方が良いのは明確だが 審判体制が取れない事情もあり どちらが良いかという事ではないので 多数決は取らず。

- 別紙の資料を提示し、見落としの多いポイントの確認と それぞれの体制での短所長所を説明
- 本来は6人制でセンターから後ろ向きに見る方法が共通の認識であった。
- これも上級クラスの対戦の中で 後ろ向きでは見られないワンバウンド球をアウトコールするケースが多く 8人による前向きの体制が昭和天山(北海道ほか)では導入されている。
- 6人制の弱点 ・ワンバウンド球が見切れない。 2シェルフロントへの雪球判定が見えない。
- 6人制の良い点・ワンバウンドでの誤審を含めてだがバック陣の判定はしやすい
- 8人制の弱点 エンドライン審判位置での見方が難易度が高い。ボックス選手の正面を見落とすケースが多い。
- 8人制の基本は必ず、審判2名が対面して選手を見るということ。
- 8人制の良い点 センターシェルター、1シェル間での配置は、選手を2方向から挟んで見る事ができる。
必ず複数審判で判定出来る体制が作れる。

逆に2シェル～ボックスエリアでは審判対応スキルが求められる。
6人制も8人制もどちらの体制でもベストの判定が出来る事が重要

※8人制で効果的と思われる方法を提言する。 8人制が取れる場合の推奨型を【別途資料】に記載します。

技術的なスキルアップに関わる、この項目が、もっと時間を割いて議論もしたかった点ですが、今回は発表まで。

⑦ヘルメットの着用 ⑫			
昭和新山＝世界雪合戦連合	日本雪合戦連盟	検討ポイント	意見 メモ欄
競技者は試合中にヘルメットを着用する。 ※ 試合中以外を容認 に今回改訂。 ②5-1・	・ヘルメットの着用は競技結果の報告を受け るまで～		
⑧靴底 スパイク			
～競技者は、ゴム製以外のスパイクの ついた靴を着用してはならない。 2-5-2	以下の使用を禁止～ ①ゴム製以外の～同じ ②金属の混入されている靴 ③安全靴 従来のルール	時代背景、商品の多様化 安全性のみ	【広島案】 ＊使用許可が困難になってきている ＊基本的には危険性のない靴・・・ 【稚内・市川案】 ＊スパイク形状は全て禁止の方が公平
⑨セーフコール			
「アウトではないこと」を表現する → 「セーフコール」 「アウトではないこと」を選手監督に伝える 為の表現 「アウト」「セーフ」が相反する 場合「アウト」が優先 セーフコールについて ※「アウト」を覆すものではない	規定は無し	・宣告した審判のアウト／セーフの言い直しは可 ただし、迅速な判断 → 認識の相違あり。	【広島案】 6) ＊常連、強豪チームは見本となり アウト宣告を受けた時の潔さは必要

⑦～⑩ 最終ページにまとめて記載。

⑩競技規則、細則に記載がない、その他検討が必要と思われる項目

		意見 メモ欄
<p>○アウトになって外に出る選手の「外に出る」とはの 定義の記載が無い (フラッグ奪取の時の、4人目の判定と同時に、最初のアウト選手がコート外に出るとき)</p> <p>雪合戦統一ルール時代から 推測される経緯</p> <p>スタート時にバックラインを踏む → アウトでは無い ラインアウトの定義 : ~ラインを完全に出た場合、体の一部が触れた場合 (少しでも踏んでいれば良い)</p> <p>センターライン : どちらかの足が完全超えた場合(踏んだだけでは進入にならない) VTライン : 同様の改訂で新山ルールはポールは使用せず、ラインをからはみ出なければOK!である ★外に出たとの 定義だけ記載が無い状態 (昭和新山)</p>	<p>「外に出る」の定義と 判定方法の記載が無い」 【背景】 最近の上級チームは とても際どいタイミングで練習している訳です。試合判定での不満も多い。 基準はラインから完全に外に出る、面倒なことをあえて言うかというアウトの判定はどちらかの足、体の一部がラインを超えた場合となる では、空中は?とか ラインアウト=外に出た ではないので、「ラインアウト定義」では3人目出たことにならない 体が全部がでなければならぬ。 単にこの表記があればということ。</p> <p>今回の改訂 日連 規則集では4人目の判定は「判定は必ず、人数を確認してから行う」と記載</p>	<p>【稚内・市川意見】 オンラインOKはスタートだけにして、あとは体のどこであれ少しでも出ればアウトもしくは4人目とした方が良いと思う。</p> <p>4人目の判断が足先に限られているのもどうしてかわからない。 たぶんセンターシェルターに線がないために現状のルールにしたと思うが、シェルターはどちらのコートにも属さないように定義すれば問題ない。</p>
<p>○フラッグポールへのフラッグ取り付け位置 ～上につけたり、下につけたり、巻きつけたり。</p>		
<p>○シャトー裏への雪球ケースの置き方 横にしてシャトーからはみ出すように置く。 バックス選手の盾になっている。</p>		
<p>○審判員の判定が最終的なものであり、異議の申し立てをする事はできない。 → 質問という形で行われている。</p>	<p>○質問出来るタイミングの記載など中断時とか、セット終了時など 審判要領に対応の仕方あっても良いのでは</p>	
<p>○フラッグ奪取時の 進路妨害 同じく 接触プレー 補足の必要性について 現行は 危険なプレーの適用が考えられるが… プロ野球のコリジョン</p> <p>仮に進路妨害が 危険な行為で、退場となった場合でもそれが決勝3セット目にてであったら…結果は変わらない。</p> <p>※岩手 暫定フラッグ奪取がある。</p>	<p>進路妨害 = 競技妨害の適用が考えられる</p> <p>接触プレー センターガチンコにて 雪球を持ったまま至近距離で 直接握ったまま「当たっている」</p>	
<p>○フラッグ奪取時 まったく同時にフラッグが抜かれた場合の判定は？</p>	<p>リーグ戦であればポイントに影響も。 フラッグ奪取は10P</p>	

⑦ヘルメットの着用 ⑧靴底スパイク ⑨セーフコールについて

⑦以降はタイムアップのため 説明にとどめています。特に現状に則した記載に改定する必要があるという内容です。

- ⑦ヘルメットの着用、新山ルール: 競技中の以外の義務を解除
- ⑧靴底は従来の記載が残っているが、時代の流れで製品が進化しており記載を考慮する時期では
- ⑨セーフコールは昭和新山が導入しているが「アウトコール」が覆されるもの、では無いとしている。

その為、道央ブロックでは判定の範囲に投げられた雪球に対して、セーフコールを先行させる方法をとっている。
明らかに、誤審だとコール審判が瞬時に判断した場合は本人のコールの言い直しについては良い／悪い、判断が分かれる。

⑩競技規則、細則に記載がない、その他検討が必要と思われる項目

- タイムアップのためこちらも説明に留めています。

記載のとおり。 細かな点であるが 規則にも細則にもその記載が無い。
要は、明確な記載があればすべて済む項目である。

重要な着目点として「相手コートに入れる選手は3人まで」の
【4人目がコートに入る】 対して 【1人目がコートの外に出る】について

コートの外に「出る」という事に対して完全にラインの外に出るという事と認識するが、その定義が記載されていないこと。ラインに関することは、アウトの定義で体の一部、もしくはどちらかの足が完全にラインを踏み越えるだが、4人目の判定に関わるこの点が「出る」としかない。 当たり前の事のように、近年、フラッグ奪取を最後の戦法として練習を重ねるチームはギリギリのところまで4人目の進入を作戦として練習もしている。
安易に4人目の進入をセンター審判が足だけをみて判断するため、即、4人目入って終了の判定が出ている。

今回の日連改定の細則の整理、補足ページに記載されているように 4人目が入った時点で、人数を確認する判断が必要であり、他の審判との連携も、上級クラスの雪合戦では今、求められている判定だという点を強調したい。
4人目判定の場合の動作補足などで、審判自信の意識も必要と思われる。

【例】コートの外に出るとはライン上の空間を含め、体の全部がコート外に出ている状態に在ること
上記のような記載があれば問題のない点である。